

# 小学校入学直前の幼稚園の生活(二)



## お茶の水女子大学

### 幼児保育研究室

一、怪獣ごっこ、おひなさまに見入る I 夫

◆怪獣ごっこ 大好きな場面(死と再生)をくり返す

九・四五〜一〇・一〇

I 夫、H 夫、T 夫、怪獣ごっこ(宇宙エースとさまざまな怪獣のたたかい)を始める。フープの輪を「シルバリング」に見立てて、「シルバー」とふり回してたたく。

I 夫は常に怪獣、H 夫は宇宙エース、T 夫はその時々でどちらかになる。

I 夫「アンギュラ」と叫んで身構えるが、すぐに H 夫にやっつけられる。すぐ立ち上がって輪をかまえると、H 夫「ガマゴジラ」と叫びながら、輪をふり回し「やっつけた。ガマゴジラは死んだ。さあ帰ろう」

I 夫「帰ろうとしたらバルタン星人が現われた」と、ポーズを

とる。I 夫に向かって「バルタンはいっぱいいるからバルタンね」という。大ぜいのバルタン星人が、宇宙エースを攻撃しようとするところらしい。

H 夫、バツと輪をかまえて「ビビー」

I 夫「死んだ」と倒れるが、すぐ起き上がって「また生きちゃうの」と身構える。

お互いに光線を発射し合ってたたくが、H 夫が「シルバリー」と叫びながら輪を回すと、I 夫「アー」と倒れる。しかし、またすぐ起き上がってしまう。「バルタン、別のバルタンね」

怪獣は結局は宇宙エースに敗れることになっている。I 夫も役割に忠実で「シルバリング」には必ず倒されている。しかし、倒れて終わるのではなく、怪獣は必ずよみがえって新しいたたかいが始まる。I 夫はくり返しくり返しバルタンの死と再生を演じている。

H夫「シルバー」と身構えながら、「最後のバルタンね、これ」と念を押す。あまりにも同じ場面のくり返しが続いたので、変化がほしくなつたらしい。

I夫は、大きなゼスチュアで苦しげに空をつかんで倒れる。倒れた姿勢で、息もたえだえに怪獣の名前を次々と口にする。「アアンギュラ、バルタン、レッド、レッドキング、ガメス……」

瀕死の怪獣の演技は真に迫っている。そして、この演技はテレビ画面の再現ではなく、I夫にとって最もふさわしい「怪獣の最期」と考えられる情景を劇的に表現しているものようである。

H夫とT夫、輪をおいてきて、「今度はシルバーリングを持たないでつかまっちゃうの」と、自分から金あみ(動物飼育用のサークル)の中に入る。

I夫が金あみの外から、ものすごい声でどなる。「私たちの仲間になるなら出してやる」。H夫とT夫がちよっと相談する。

I夫「コラ、仲間よ、出る」「レッドキング、ウオー」「アングィラ、ガウオー」と、次々と怪獣の名前を呼び上げてうなりをあげる。先ほど死んでいった怪獣たちが、続々とよみがえって名乗りをあげているらしい。

「とりこよ。コワクナイカ!!」ものすごい声でどなる。

H夫とT夫、外へ出てきて、また輪を手にする。「シルバーリング」が威力を発揮して、怪獣は凍えてしまったり、燃えあがっ

たりするが、そのたびによみがえって、新しいたたかいが始まる。

H夫とT夫、掘り下げられた砂場にとびおる。「ここは沼だ」

I夫、砂場のふちに仁王立ちになって叫ぶ。「滝よ出る! 大滝よ出る!」

H夫が小声でいう。「火よ燃えろ!」

I夫「火よ燃えろ!! 地獄の火よ燃えろ! 宇宙エースたちを焼き殺してしまえ」

H夫、小声で「燃えあがれ! 燃えあがれ! 地獄の火よ!」

I夫、大声でゼスチュアをつけながら「燃えあがれ! 地獄の火よ!! 恐ろしい地獄の火よ!! 宇宙エースを焼き殺してしまえ!!」

H夫は演者でもあるが監督の役割を兼ねているらしく、I夫に小声で次のせりふや動作のヒントを与えている。I夫はそれらを迫真の演技で熱演している。

H夫とT夫、砂場からとび出して、ものおきのかげまで退く。

I夫、両手を広げて「これで地球は私たちのものだ」と叫ぶ。

H夫、ものかげからバツと現われて肩をそびやかし「それはどうかな」ただし、この演技が自分で気に入らなかつたらしい。

「もう一度やり直し」といって、ものかげにかくれる。

I夫「これで地球は私たちのものだ」

H夫 「そうはさせないぞ」とパッととび出して身構える。

H夫とT夫、またかくれる。I夫は砂場のふちで手を振り上げながら「滝よ出ろ！ 地獄の火よ燃えろ！」とぞごむ。

I夫、周囲を見回して「さあ、これで宇宙エースは死んだ。地球は私のものだ」と両手を上げる。

H夫、パッととび出して「レッドキング！ ゆだんするな。私は不死身だ！」とみえを切る。

H夫にとって、宇宙エースが死んだようにみえていて不死鳥のように現われるこの場面が、よほど気に入っているらしい。何回もくり返し、その度に演技を工夫している。このあたりの感じは「怪獣ごっこ」というより明らかに「劇」であり、子どもたちの関心は、その「劇」の進行よりもむしろ、お気に入りの一場面をいかに最上に演ずるか、ということにあるらしい。H夫、I夫、T夫は、せりふを変えながら、同じような遊び方を続けている。劇的な言葉の表現に興味があるらしく、からだの動きは単調なくり返しだが、せりふの方は段々ものすごくなってくる。

☆☆☆☆

怪獣ごっこはI夫の好きな遊びで、今までもしばしばくり返されてきた。しかし、きょうの遊びは、きわだった幾つかの特色をもっているように思える。

第一に、「ごっこ遊び」というより「劇」の要素が強いこと。

したがって、怪獣になっているI夫にしても怪獣になりきって遊ぶというのでなく、怪獣としての演技をいかに巧みに演じるか、という方向で動いている。そして、この演技には「型」がある。単に「○○らしく振舞う」のではなく、「○○の型に合わせて振舞う」のである。宇宙エースのよみがえる場面のようには、何回もやり直しているが、肩をそびやかして胸を張り、前方をきつと見すえるという基本型は、いつも保たれていることなど、その典型的な例といえよう。

この時期の保育者の気持の中に、「みんなて劇を楽しんでから卒業していくように」というのがあって、子どもたちのリズム劇遊びが大切にされていた。「シンデレラ」「大きなかぶ」「花咲か爺」など、子どもたちのレパートリーも広がって、きょうも室内では十数名の子どもたちによって、それらが演じられている。きょうまでの動きを見ると、リズム劇に対しては一般に女兒の関心が高く、女兒の参加が目立っていた。

しかし、このI夫たちが自発的に演じている創作劇「宇宙エースと怪獣のたたかい」を見ると、劇に対する男児の関心が低いなどとは、とうていいい得ない。たまたま「シンデレラ」には、男児の積極的な参加をはばむものが若干あった、というだけにすぎないようである。

そして、「卒業までに一度は劇の楽しさを味わわせたい」とい

う保育者の願いが、こんな形でも実現していて興味深く思われる。

次いで興味深いのは、I夫とH夫がくり返し演じている場面のテーマである。I夫が飽くことなくくり返すのは、怪獣が死んで再びよみがえる演技であり、H夫が執着するのは、宇宙エースが死んだとみせて実は生きていて再び現われる場面である。子どもたちが怪獣ものに寄せる異常なまでの興味の一因が、くり返される死と再生、あるいは不死身性にあるという事実をあらためて確認した。

今一つ、子どもたち、特にH夫の役割のとり方がおもしろい。

H夫は終始宇宙エースを演じていたが、同時に、I夫の演じる怪獣に、せりふをつけたり動作を示したりする役割をとっていた。

I夫は小声で示されるそれらを受け入れて、より派手により劇的に表現する役割、つまり名演技者であったが、H夫は、演技者であると同時に監督の役割をとっていた。

これは「劇」という遊びをより面白く展開させるために、子どもたちの中から自然に出てきた役割と考えられるが、ここにもこの遊びに対する子どもたちの意識が投影されている。つまり、この遊びでは、怪獣が勝手にわめいたり、でたらめにあばれたりしては困るのであり、「この場面ではこの型で動き」「ここではこんなせりふを口にする」という「劇の筋書き」（実際にはそんな

ものはないのだが）にそって振舞う必要があるのである。そのために、「筋書きを示す人」のように振舞う役割が必要となってきたのであろう。

#### ◆おひなさまに見入る（美との出会い）

##### 九・三〇〜九・三五

I夫は、H夫のあとを追いかけて遊戯室に入っていく。H夫はすみっこにつまめた大つみ木の上に立っている。

I夫は「H夫ちゃん」と声をかけるがそのまま正面のおひな壇の前に立つ。

おひなさまを上から丁寧に見ていく。内裏さまから順々に視線を移動させる。

ひな壇の方を見たまま、うしろ歩きに後退してホールの真中あたりに立ち止まり、もう一度全体を眺める。

「きょうは嬉しいひなまつり」と歌いながら、ひな壇の前を小走りにかけて回る。手をうしろに組んでビョンビョンとんでみる。

いかにも明かるい開かれた感じである。

見学者が三名入ってきて、ひな壇を見上げる。I夫はそばに立って「これ、おひなさま」と説明する。おひなさまの美しさを誇らしげに告げる態度である。

H夫に呼ばれて、遊戯室を出ていく時、I夫はもう一度ひな壇に近より、おひなさまを見上げる。目をはなさずに後退して、も

う一度全体を見る。

遊戯室内をぐるっと一回りして、さっき話しかけた見学者の顔を見上げ、何かいいそうにするが、H夫のあとを追って部屋を出ていく。

☆☆☆☆

園の行事としての「ひな祭り」は、すでに終わっている。人形が飾られてから数日を経過しているので、その間に、I夫は何回か人形を眺める機会をもったであろうし、「ひな祭り」には、少くともこの人形の前で半日を過ごしているはずである。

しかし、きょうのI夫は、一人だけで、今までとは異なる新しい体験として、ひな人形と出会っている。

丁寧に順々に見ていく視線の動きと、目をはなさずに後退していったらためて全体を眺め直すそのポーズからは、ひな人形へのいとおしみと美しさへの感嘆が、きわめて素直に流れ出している。

I夫の目で見える世界に、ひな人形は数日前から登場していた。しかし、きょうはじめて、あるいは再び新しく、I夫は自分の感情を動かされている。「ああきれいだ」と感嘆し、数歩退いて全体を見直し、「なんてかわいいんだろう」と感じる。I夫の感情は、今見ている対象の中に入りこんでいて、いっぱいひろがっている。

見学者に向かって得意げに語りかける時、I夫にとってひな人形は「説明の対象」ではない。見えているものを単に解説しているのではなく、自身と重なり合い、自身の中にある自分を動かすものを、他人に伝えようとし、感動を分かち合おうとしている。

一人で小声で歌を口ずさみ、ひな壇の前を回る時、その動き全体から、「美しいものとの出会い」によって引き起こされた喜びが感じられた。I夫はこの時、一人だけで、本当の「ひな祭り」を祝ったのである。

「美しいもの」が、子どもの生活の中におかれていて、子どもがその存在を知らされている。そして、子どもが自身でそれとかわりをもち得る時間が提供されている。そんな場合に、子どもの中に思いがけなく深い体験が成立することがある。この記録は、その一例として興味深く思われる。

しかし、このようにして成立する子どもの体験に関して、保育者がそのすべてに気づくことは不可能であろう。この例でも、I夫がひな壇の前に立ったのは、たまたまH夫のあとを追って遊戯室に入ってしまったからであり、偶然的の所産である。

おとなの気づいていない世界で、子どもが体験することからの重みを、あらためて考えさせられる観察例である。

この日、室内では女兒たちが音楽劇あそびを展開し、二度目の

高まりには、男児も数人参加した。物理的には遠い屋外で、創作劇あそびに熱中しているI夫とH夫。また、五分という短時間の  
中でおひなさまと出会い、貴重な体験をしたI夫。

これまでの幼稚園の生活の中で、保育者と子どもと物とがかかりあって展開された、さまざまな体験を自分のものとし、主体的に遊び、生活している子どもたちの姿をここに見ることができよう。五歳の三学期という、この時期の、保育者の子ども（集団）へのかかわり方は、ある時は一つのへやの中の一人のメンバーにすぎず、またある時は、子どもと保育者の役割が逆になっており、子どもたちの遊ぶ（生活する）姿の中に保育者を見い出すこともしばしばであった。保育は「保育者と子ども」というワクに規定された、保育者の、ことばによる直接的な指導だけではないということ強く考えさせられた一日であった。（松井とし）

## 二、誕生会のかご作りを考える

自発的に遊ぶ子どもの生活が尊重された保育の中で、誕生会のかご作りは、子どもたちにとって、ひと月に一度めぐってくる、作ることが期待された活動であった。このかご作りは、子どもたちにとどのようにとらえられ、生活の中に位置づいていたのであろうか。

かご作り（その一）

（松井）

毎月、毎月、お誕生会が行なわれ、そのおやつを入れる「かご」を、一人一人が作っている。

K夫は、十月二十三日にも、一月二十二日にも「先生、ボク、お誕生会のかごつくる」と大きな声で、宣言するようになって、この活動に入っていた。H子とN子は、かごを作り始めるまでに次のような会話をしていた。

十二月十一日 九・五〇〜一〇・一二

H子「N子ちゃん、お誕生会のかご作ったの」

と、いって、N子に近づいていく。

H子「お人形は作ったでしょ」

H子「お花作った？」と思いついたようにいう。

H子「しょうがないから……」といいながら、二人でままごと

コーナーの畳にすわる。

N子「めずらしいもんじゃないかね」

H子「さくらんぼにしようか」

H子「そうだ、こん中で何か」と、ままごとのたなをのぞく。

N子「お茶わん」

H子「お茶わんにするか」

二人、畳にねそべる。

H子「何にする」

H子「何か動物を作ろうか」

ここに、Y子がきて、ちょっと話をして行ってしまふ。

H子「何にする」

二人、考えている。

N子「りんごは？」

H子「りんごね。そうね、でもね」

N子「コーヒークップ、作ろうか」

H子「そうね、それにしようか。でもね」 またY子がくる。

Y子「いいこと思いついたんだ、この頭の中に」

Y子「かご、おつかいの」

というが、二人は同意しない。Y子は行く。

二人はまた、考えている。

H子「あっ、あれがいいっていったんじゃない」

二人で同意しあって、うれしそうに笑い、手をつないで先生のところに行く。

二人で「コーヒークップ」と先生にいう。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

この活動のスタートにおいて、K夫の場合は、一気にスタートの壁をつき破るような形で始め、H子とN子の場合は、かなり戸惑いながら、模索に模索を重ねて、いつの間にかこの活動に入りこんでいた。二人には、作らなければならないものとしてのかご作りが、かなりの圧力となっていたようだ。そして、それも新し

いもの、めずらしいものにしなければならないという感じも強い。作るものは違っても、毎月毎月、『かご作り』としてくり返していることなので、その活動の中に新しさを加えることに、困難を感じているようだ。

作るものが決まってからは、互いに少し離れた所に席をみつけて、テンポをあわせながら、製作を進めていた。始めるまでの迷いは、あとまでは尾をひいていなくて、十分に迷い、考えたことが、あとの活動を動きやすくしていた。

K夫は、元気よいかけ声で始めてはいるが、その後は『かご作り』のルールにデンと腰をおろしてしまつたように、先生の所と、製作の机との間を行き来し、何か、機械的にできあがっていくようだった。この製作の間のK夫の表情には、製作が進むにしたがっての感動というようなものは見られなかった。一月二十二日の場合には、かごを作り終わってからの活動が、生き生きとじていて、『かご作り』の時の無表情な様子と対照的であった。

かご作り(その二)

『かご作り』が、その子にとって、多少、トラブルとしてとらえられているような場面を見てきたが、次に、かご作りを十分に楽しんでいる場面としてT子の例を示す。

十一月二十日 T子は、丹念に円形の画用紙を茶色のマジックでぬつている。円がぬり終わると、細長い三角形を切りぬいて茶

色にぬる。これを、いくつもいくつも作っている。作ったものをもつて、となりの子に「いが、いが、いが」とさすまねをする。また、いがを作り続ける。いがができあがると先生のところへ行き、先生の背中を「いが、いが、いが」とつつく。

先生の助けで、さっきぬった円を半球形にして、それにいがをつけ始める。一つつけてとなりの子に「つきましたよ」と見せる。また、一つつけて、自分の頭や、となりの子の頭にのせてみる。いがをつけ続けながら、「おさるのおばさんこんにちわ」と歌い出す。両となりの子がいっしょに歌う。

T子はまた、真剣な顔でいがをつけ、さっき切ったのを全部つけて、また足していがを作る。T子のまわりでかご作りではない動きをしている子が、T子に話しかけたり、さそったり、かかわりをもちながら動いていて、T子もそれに応じながら、真剣にかご作りを進めていた。

また、A子は、十一月二十日には、遊園地のコーヒーカップを模して、大がかりなかごを作っていたし、その後、シンデレラの馬車のかごを作っていた。できあがった形もかなり立派なものだが、その作る過程においても、十分に自分のものとして、生き生きと楽しそうに進めていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

十月、十一月、十二月、一月の、何人かの子どものかご作りの

場面を見てきたが、この活動に、毎月毎月、新たな楽しさを感じている子や、それを重荷と感じている子や、あるいは、あまり感動もせずに形を作りあげてしまう子など、子どもの中で『かご作り』は、さまざまに位置づけられているようだ。できあがったかごを見渡した時、毎月毎月、子どもたちの工夫のすばらしさに驚きを感じる。

立体であり、物を入れるという機能を必要とするということが、より工夫しやすいう要素となっているといえる。一方、毎月毎月、くり返し行なわれる活動であるので、そこに、常に新しい感動を感じながら『かご』を作っていくことが、困難になるという面もある。

『かご作り』は、作る過程の問題や、ある物を完成させるということや、自分で作った物を使う、あるいは、自分で使うために作るということや、みんながそれぞれに作るということなど、子どもの中に生かしていったよい要素をたくさん含んでいる活動である。どこか一面がうきあがったり、どこか一面が切りすてられた形で、子どもに位置づけられることがないようにすることが、好ましいと考える。

(秋間直美)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

かご作りが、「作らねばならないもの」として、かなりの圧力になっていた」と思われるH子とN子の場合、「先生、ボクお誕生



会のかご作る」といって活動に入ったK夫の場合は、ともにかご作りが大きな課題になっており、子どもたちは、その課題に正面から向かいあっていた。

しかしT子とA子の場合には、同じかご作りが、作らねばならない活動ではなく、作りたい活動としてとらえられていたように思われる。作りたい物のイメージを、一つ一つ確かめつついっしょうけんめい作っていて、気がついたら、お誕生会のおかしが入られる物(かご)ができていたのかもしれない。結果においては、同じ機能をはたす物ができあがったが、かご作り活動のとらえ方、とりかかり方、作るプロセスは個々の子どもによってさまざまであった。かご作り(課題活動)は「生氣ある活動の妨げ」となる活動であってはならない。

どのような状況が創造されると、課題活動が個々の子どもにとって、生きた活動になり得るのであるか。(松井)

### かご作り(その三)

先生のところに見せようとして、数人の子どもが作りかけを持って待っている。

先生「あ、お皿ね。いいじゃない。手をついたら。そうするとよくなる」

K「せんせー。この馬車……」

F「できました」(と時計をみせる)

先生時計の箱に手をいれて、「こうやったら」と説明する。

H「せんせー、もう遊んできていい?」

先生「よく片つけてね」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

この日は、翌日の誕生会のために、朝からかごを作っている。めいめいの考えで、時計のかご、馬車のかごなどおもしろいものがたくさんある。九時ころから、十一時すぎまで作りつづけている子が多数あり、この日は、身体的にも移動が少ない。

全体に落着いた静かなふんい気はあるが、活気が感じられない。ひとりずつを見ても、打ちこんで作っているという様子が見えない。同じ製作でも、子ども自身が創意とスリルをもって、生き生きと動いているのを見ることもある。

この日の沈滞のもととは、翌日までにかごを作らねばならないというタイムリミットの強制感であろう。ひとりひとり違ったものを作っている、生命力が湧いてこない。五歳児は、明日までに作るという課題を理解しているから、それをするものの必要性を感じ、その課題にしたがう。しかし、その時に同じようなことをしている、生き生きしさを失い、沈滞する。毎月きめられた、かご作りには、それなりの意味のある時期もあるが、それがかえって生氣ある活動の妨げとなる時期もあるといえよう。

(津守 真)